

## 古都探訪

# 『嵯峨行程』余滴

——宇多野・鳴滝あたり——

成 田 俊 治

「予好山水尋名勝之癖アリ 延宝八年庚申秋九月、  
一二ノ同志ヲ誘ヒ 西山ノ処々ヲ尋ント欲シ 十二日  
味爽 白雲村遠碧軒ヲ出テ……」

の書き出しで、嵯峨・西山を尋ね、社寺・名所旧蹟を  
紹介したのは『西遊左券』（別名『嵯峨行程』）の著者  
黒川道祐である。

儒学者であり安芸藩の藩医であった彼は、延宝の頃  
京都に移り新町今出川（白雲村）に居をかまえ（遠碧  
軒）、古典の研究のかたわら殆んど毎年洛中洛外はも  
とより江州にも足をのばし、丹念に地理を考え古記録  
・金石文を書きとどめた。そして貞享二年（一六八五）  
に『日次紀事』、翌年には山城国の地誌『雍州府志』  
を刊行している。彼が嵯峨・西山を尋ねたのは延宝八

年（一六八〇）九月十二日から十四日の三日間で、そ  
の紀行文が『嵯峨行程』である。

彼は白雲村遠碧軒を出てより、正親町通を西へ一条  
反橋を渡り、北野天満宮・平野の社を北に見、紙屋川  
の西の方、八丁畷を過ぎ宇多川の板橋を渡り、妙心寺  
北門・仁和寺をすぎ、宇多野・鳴滝を西へ、帯取池を  
右に見て広沢の池の南に出て北嵯峨に至り、さらに下  
嵯峨・嵐山、梅津に至っている。彼はその間の主な社  
寺、名所旧蹟、陵墓などを紹介している。そこで、こ  
の古都探訪は『嵯峨行程』を手引きにしなが、嵯峨  
への入口となっている宇多野・鳴滝周辺を散策し、彼  
がふれていないところをみていくことにしよう。

北山から宇多野にかけてなだらかな山々がつらなり、  
その懷にいだかれるように寺々はある。竜安寺、転法  
輪寺、蓮華寺、仁和寺、妙光寺、西壽寺、法蔵寺、三  
宝寺など大小の寺々がそれぞれの歴史を荷って静かな  
たたずまいをみせ、また鳴滝の集落には了徳寺、専念  
寺が、福王子には善福寺がそれぞれ地下の菩提寺とし  
て人びとと結びついている。

またこの地は九世紀末、光孝天皇の御願寺として最  
初の門跡寺院として出発した仁和寺の寺域で、盛時には  
広沢から双ヶ丘、花園を境に竜安寺の地を含む地域

を領し、円融寺（円融天皇御願）、円教寺（一条天皇御願）、円乗寺（後朱雀天皇御願）、円宗寺（後三条天皇御願）のいわゆる四円寺をはじめ、紫金台寺、香隆寺、北院など七十余の子院や院家が建ちならび、一大仏地を形成していたのである。今日現存するもの遍照寺、蓮華寺など数ヶ寺であるが、寺、院、堂、房、殿のついた地域の町名にその名残りをとどめている。

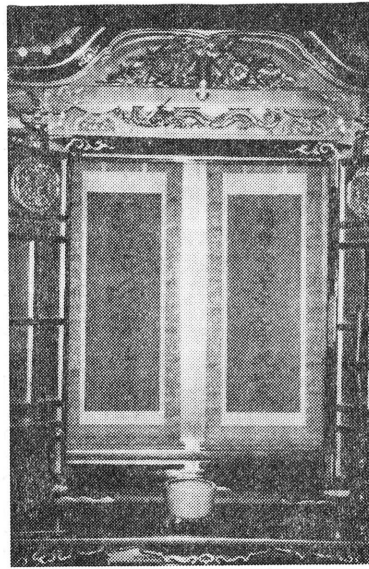
さて、仁和寺の門前を西へ行くと五差路に出る。右は周山街道、左は双ヶ丘の西麓をへて花園へ、さらに西へ向えば北嵯峨へ『嵯峨行程』の道順である。この附近一带を宇多野といい、平安初期には天皇の遊獵地の一つとして、桓武天皇をはじめ歴代の天皇が臨幸され狩猟を楽しんだところである。五差路の角に福王子神社がある。この神社は光孝天皇皇后班子を祭神とし、仁和寺の鎮守ともされ、この地の産土神である。本殿は寛永二十一年（一六四四）仁和寺宮寛深法親王の造営と伝え、拝殿・鳥居・石灯籠とともに重文に指定されている。本殿のそばに「夫荒神」を祀る小社がある。『嵯峨行程』に、丹波の氷室から禁裏へ納める氷を運ぶ役夫が、氷のとけるのをおそれて疾走したため、遂にここで氣息絶えて死んだ、その霊が祟りをなしたので社をたて祀った、と伝えている。道祐は、これは実は摩利支天を祀ったものという。

福王子神社から周山街道を約二百米、左へ入ると真宗大谷派の徳寺がある。この寺は古くから鳴滝村の菩提寺として、また近辺の人びとから大根焚きの寺として親しまれている。

ここに親鸞聖人・蓮如聖人の来訪伝承があり、親鸞聖人真筆の『すすきの名号』、蓮如聖人真筆の『六字名号』を伝えている。寺伝によれば親鸞聖人関東より帰京後、しばしば愛宕山月輪寺に元祖法然上人の遺蹟を訪ねられ、その往還の途次この地を訪ねられたが、建長四年（一二五二）十一月、しばらく鳴滝の地に滞在され、地下（じげ）の人びとに他力念仏を勧められた。村人聴聞し歓喜し聖人に深く帰依したのである。時しも冬のこととて当地の産物である大根の塩焚きで聖人をもてなしたところ、聖人は村人の厚志を大いによろこばれ、庭前にあったススキの穂を筆に、ナベのススを墨に、『帰命尽十方無碍光如来』の十字の名号を書きあたえられたのである。これより村人は毎年十二月になると寺に集り、聖人の遺徳をしのんで塩味の大根を食べ、報恩講をいとなんだという。

それよりのち、聖人の跡を慕って明応三年（一四九四）この地を訪れた蓮如聖人は、この『すすきの名号』を拝し、新たに『南無阿弥陀仏』の六字の名号を書き授けられたという。こうして『すすきの名号』『六字

名号』が寺宝として伝えられ、また親鸞聖人は八十歳の念仏弘通の姿を自刻され、仁和寺慶雅法橋に与えられたという御影も安置されている。なお寺内には石垣にかこまれた「すすき塚」がある。



親鸞聖人「すすきの名号」  
蓮如聖人「六字名号」

このような伝承をもつ徳寺は、寺としては室町末の大永四年（一五二四）両聖人の遺蹟に因んで僧正西によって開創されたのであるが、それより約九十余年の後、元和の頃から了徳寺過去帳は記録されはじめており、鳴滝墓地で最も古い墓石は寛永五年（一六二八）を始めとしているところから、江戸初期から地下<sup>ヒゲ</sup>の菩提寺としての機能を持つに至ったといえよう。そしてもともと村人だけのささやかな報恩講の大根焚きの行事であったものが、いつの頃からか各地に伝えられ、

聖人の遺徳をしのぶ人びとが参詣するようになってきたのである。寺内にある大根焚き用の什物や石碑に「元禄」「文化」の年号がみられるところから、この頃から徐々に信者が参詣するようになり、また本堂に「天保九戊戌十二月六日鳴滝御坊 施主洛陽長安寺門徒鑑屋利兵衛」の刻銘のある四角灯籠があり、これによれば他の寺の門徒である人が、了徳寺の報恩講の時に灯籠を寄進していることが知られ、これらによっても聖人遺蹟として信仰を集めていたことがうかがわれる。

現在、十二月九・十両日の報恩講に、聖人接待の故事にちなんで大根をたいて供養されるが、その大根を食べると中風にかからないという信仰があり、近年は門前市をなす盛況で、京の初冬の風物詩となっている。当日使用される大根は、地元の明神講の講田で収獲したものをうい「講田大根」とよばれたが、今では講田はなく丹波から取りよせられるという。昨年は使用された大根は三千数百本、油揚げ二千数百枚、二日間で一万二千人の参詣者があったという。

京の町の人びとに膾炙され、ながい伝統をもつ了徳寺の「大根焚き」の行事は、寺の行事として始まったのではなく、親鸞聖人に帰依した地下<sup>ヒゲ</sup>の人びとの信仰として始まり、それぞれの時代に信仰に生きた名もない庶民によって受けつがれてきたことに、大きな意義

を認めねばならない。

了徳寺から周山街道をへだて、低い山や谷が出入りする山道を北に進み、道が終るところに泉谷西壽寺がある。三方を山にかこまれ閑静なたたずまいをみせる。この寺は浄土宗捨世派で、近世初頭の学僧、琉球に浄土宗の僧として始めて足跡を残し、琉球王尚寧王の帰依をうけた袋中良定の開創である。

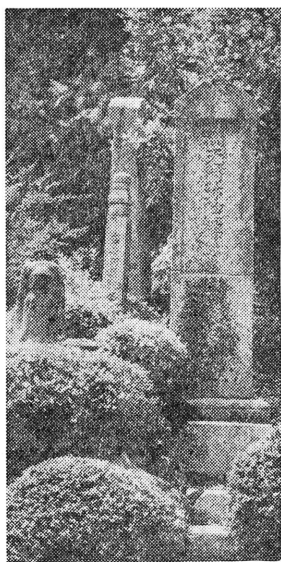
泉谷は七谷の一つで清冽な泉が湧出すところから通称「いずみだに」とよばれる。寺開創の際、山を穿ったとき、日、月、星の文字を記した靈石を得、その石の下から清水が湧き出したといわれ、本堂裏、山手にあるこの泉は今日に至るも渴くことはないという。また靈石は当寺の鎮守として本堂の西の小丘の上に祀られている。

さてこの寺は、寛永の頃、京・高辻に住まい熱心な念仏信者であった北出嘉兵衛なる者、三条大橋の檀王法輪寺に通い袋中上人に帰依していた。寛永四年（一六二七）北出嘉兵衛はこの地に隠棲し、一字の念仏道場を開き、袋中上人を請じて開山としたのが始まりという。のち一時衰退したが万治三年（一六六〇）第五世愚故上人によって再興され、この時本堂も建てられた。明治初年一旦廃寺となったが、明治十七年颯田諦

真尼によって復興され、爾来四十余年にわたって寺構の整備に心血を注ぎ、旧時の盛観に復さしめた。この頃には極楽庵、雲庵など五庵があったようで、ここで多くの尼僧が念仏三昧の生活を送っていたのである。

本尊は丈六阿弥陀如来で、再興の主、愚故上人が近江国甲賀にあった新宮大明神の本地仏を移したものと伝えている。上品上生の定朝風に作られた優れた尊像で、鎌倉時代の作といわれ、その円満具足した柔和な尊容は、我々を慈愛のまなざしで見守っていて下さるようである。脇壇の厨子には合掌した袋中上人の肖像及び袋中上人の位牌、寛永八年に入寂した北山嘉兵衛の位牌が祀られている。

境内には袋中上人の墓や名号石、また近世の儒者藤井懶斎、桑原空洞の墓がある。藤井懶斎は山崎闇斎に儒学を学び、医学も学んだが、一病者への薬餌投用の



袋中上人名号板碑

誤りから医術をすて、この鳴滝に隠棲し生涯を終えたという。その他、律院の伝統を守り生涯精進で通し、節約を重んじ、かつ家政学園発展の基礎を確立させ近代における偉大な女子教育者の一人にかぞえられた大島徹水上人、そのあとをついだ石橋誠道上人、三枝樹正道上人の墓も並び建てられている。

都会の騒音から隔離され、蟬しぐれの中でご本尊のもとに坐す。静けさはさらにまし、阿弥陀如来の大慈大悲に抱かれる憶いは私だけではあるまい。それぞれの歴史をもち、色々なかたちで現代に生きる寺々の中で、捨世の遺訓を伝え念仏道場としていつまでも生きたいと、質素な庫裡の座敷で語る住職尼の言葉が印象的であつた。

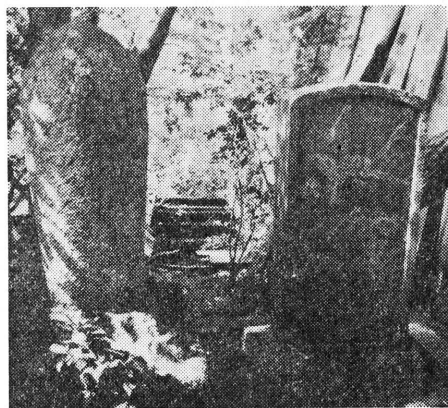
ふたたび周山街道に出、高雄に向つて二百米、三宝寺橋のたもと南側の生垣の中に『宅間塚』がある。ここには次のような伝説がある。まず『嵯峨行程』に「橋ノ東北 宅間勝賀カ石碑アリ 宅間梅尾春日ノ神像ヲ 親子写スニヨリ 帰京ノ時此ノ処ニテ墮ノ馬死ス 土人憐之立碑」と紹介している。また『拾遺都名所図会』にも次のように記されている。

「鳴滝高雄道のかたはら右のかたにあり、伝に云くむかし絵師宅摩、梅尾明恵上人を信敬す 明恵、解

脱の両上人は春日、住吉の二神常に擁護を加えたまふ。ある日宅摩 明恵の宅に至るに 障子の内に人無うして上人と話答の声あり 宅摩あやしみてこれを問ふに 時々春日、住吉影向あり けふもまたしかりとぞ 宅摩寄感して障子の間より窺ふに兩人列座す 光相および衣服よのつねに異なり やがて筆を執つて譚ろに神相をうつす この画像今梅尾山にあり 宅摩帰京の時 この所において落馬して死す これすなはち凡人神相を写す冥罰なりとそ 遂にここに塚を築きて験とするなり」

宅摩勝賀（為基）は、父為遠、弟為久とともに鎌倉初期の代表的な絵仏師であつた。彼は神護寺・東寺に係して活躍し、嘉永三年（一一八四）に法橋、建永元年（一二〇六）頃には法眼になっている。彼は梅尾明恵上人に深く帰依していた。ある時、上人の室を訪ねたところ、室中に人がいる気配がないのに上人が誰かと話し合っている様子、不審に思つて寺僧に問うと、時々、春日・住吉の二神の影向があり、今日も二神と談じておられるとのこと。彼は怪んで隙間から窺うと、たしかに二神が坐している。かねてより神の真姿を描いてみたいと思つていた彼は、早速筆をとつて二神像を写しとつた。ところがその帰途、落馬して頓死してしまつた。世の人これをみて凡人が神相を写した罰で

あるといったという。そして村人は勝賀をあわれんで死んだ場所に塚を立てたのが、この宅間塚である。



宅間塚の卵塔・墓碑

この塚はもと街道の右、橋の東北の小丘にあったというが、近年今の場所に移され、現在、卵塔と延宝七年（一六七九）の墓碑がある。この墓碑には塚のいわれが刻みこまれているが、ながい年月の風雨に判読し難く、その年月はまた伝説も次第に忘れさせてしまうだろう。僅かに「宅間町」という地名のみを残して。

宅間塚をたずねたとき、橋のたもとに住む人の話に、数年前、四国から老婦人が尋ねてこられ、長い間、墓の前に佇み、拜んでおられたという。因みに老婦人は

宅間姓であったという。

鳴滝をあとに、ふたたび御室仁和寺の前へ出て南をのぞむと、御室と花園を結ぶように北から南へ三つの丘陵が連なる。すなわち一ノ丘、二ノ丘、三ノ丘とならぶ双ヶ丘である。近年、樹木が伐られ荒れてはいるが、まだ一部には青松が生い茂り、数多くの和歌に詠まれた王朝貴族遊樂の地であったおもかげを残している。一ノ丘の山頂に小円墳があり、『令義解』の編者で詩文にもすぐれた清原夏野の墓と伝え、その山荘は三ノ丘東麓に構えていたといわれる。

さて二ノ丘の東麓に、長泉寺という兼好法師の墓があり、兼好法師の像を安置する浄土宗の尼寺がある。この寺の開創は正保四年（一六四七）で、元禄・享保年間に調査された浄土宗の末寺帳である『蓮門精舎旧詞』によれば

「長泉寺 岡 開山朝蓮社善誓正雲西堂生國朝鮮人也 大閤秀吉高麗入之時渡海也 師匠江戸伝通院御玉屋別当心誉上人也附法之師不知 建立正保四丁亥年中 寛文七丁未年七月廿五日寂行年不知当住迄第六世也 右寺吉田兼好之遺跡」

とあり、また『雍州府志』にも長泉寺の開基についてふれている。

これらによれば朝鮮に攻め入った秀吉の軍に捕えられて異境の土を踏んだ高麗の一男子が、晩年僧となつて開いた寺であることが知られる。当寺にまつる位牌には「当寺開基 朝蓮社正雲善譽頓阿大和尚」裏に「寛文七<sup>（癸未）</sup>七月廿五日往生八十六歳」とある。

この寺が兼好法師の遺跡とされたのは、長泉寺開創と同時にあつたと思われる。道祐の『嵯峨行程』に

「凡ソ一ノ岡ト二ノ岡トノ間ニ墳墓多シ古ハ無<sup>ニ</sup>貴賤<sup>ニ</sup>此所ニ葬ケルト見ユ 兼好法師カ庵ノ前ニ並木ノ桜ヲ種ヘ 終ニ栖家トセシト書シモ此ノ所トオホシキ地アリ 今ハ田トナリ兼好地ト云ヘル字ハカリ



兼好法師墓・歌碑

残レリ 然ルヲ一ノ岡ト二ノ岡トノ間ニ長泉寺ト云ヘル寺アリ 其ノ処ニ近世好事の者兼好カ塔ヲ建ツ」とすでにふれているし、また『山城名勝志』にも兼好の旧跡として「元在ニ二岡西麓ニ近世其墓移ニ岡東長泉寺ニ兼好伊賀国卒」とある。これらによれば、兼好はこの地を愛し、二ノ丘の西麓に庵を結び無常所であつたここを終焉の地としたのであろう。その後、その跡に塚がつくられ、そして近世初頭、二ノ丘の東麓に長泉寺が建立されるに及んで、好事の者によって兼好の墓が長泉寺に移されたと思われる。いま長泉寺には兼好自筆という家集と兼好法師像がある。その家集の中に「ならびのをかに無常所まうけてかたはらにさくらをうへさすとて」の序詞について「ちぎりをく花とならびのをかのへにあはいくよの春をすくさん」の歌がのこされ、兼好法師像は裏に「兼好像徳潤模刻之」とあり、江戸中期以後の作という。

また長泉寺墓地には苔むした自然石に兼好法師と刻まれた墓石と、右の歌をしるした歌碑がある。墓石も歌碑も長泉寺造営のときに建てられたものであろう。

夏の暑いひる下り、歌にちなんで植えられたという何代目かの桜の古木の根もとにある兼好法師の墓に、住職尼によって花がたむけられた。

（なりた しゅんじ 文学部教授）